



筑波大学附属図書館ボランティア広報紙

第19号

ボランティア活動15周年記念号

目次

「大人の知恵」－ 図書館ボランティアの15年			
	附属図書館長	波多野澄雄	1
オランダ・ドイツの図書館管見	前附属図書館長	植松貞夫	
附属図書館ボランティア専門委員を終えて			
	人間総合科学研究科教授	真田久	2
ボランティア15周年に寄せて		谷田部伸子	4
図書館総合案内		島田久美	5
対面朗読活動		柳沢由紀子	6
利用環境整備活動		小園良子	7
特殊資料整理		海津裕子	
広報部活動の歩み		飯田ふじ子	8
図書館は大学の心臓部 ～図書館見学案内～		山内衛	9
日本文化紹介活動		大森久美子	10
図書修理自主勉強会		飯島倍雄	11
私のボランティア活動を振り返って		横手喜久子	12
ボランティア活動、この5年を振り返って		尾崎みち子	
明るい雰囲気図書館		中島清明	13
体芸図書館ボランティア活動体験記		市村光志郎	
楽しく修理活動をやってま～す！ <体芸図書館修理活動記>		山内衛	14
※ 平成17年～21年 研修項目一覧表			16

編集にあたって

筑波大学附属図書館ボランティアは、その活動の一環として広報紙「うたがき」を発行しております。前号「うたがき」第 18 号では「行ってみよう！筑波大学 Part II」と題して大学内の公開されている施設（一般公開されていないものもあります）を取り上げており、本号 19 号は「ボランティア活動 15 周年記念号」として、15 年間の変遷を振り返っての内容となりました。

筑波大学は地域に開かれた大学として、一般の人も図書館をはじめ多くの施設や公開講座への参加が可能になっております。

私たちボランティアは、図書館でのボランティア活動を通して筑波大学のさまざまな施設や行事に参加する機会がありますが、図書館の中でボランティアとして活動することだけでなく、そこからさまざまな刺激を受け、知的好奇心を開花させていくのも、附属図書館ボランティアの魅力のひとつです。ご興味をもたれた方々のボランティアへの参加を歓迎します。

また、広報紙「うたがき」は第 17 号から筑波大学電子図書館ウェブサイトのボランティアのページに掲載されていますので、私たちボランティアの活動をより広くより多くの皆さんに知っていただければと願っています。

広報部員一同

「大人の知恵」 — 図書館ボランティアの15年

筑波大学附属図書館長 波多野澄雄

附属図書館のボランティア団体「図・ボラの会」の発足から15年が過ぎました。大学図書館の役割が知識や情報の提供から、学習支援や非来館型サービスの提供に向かっているとき、今やボランティアの皆様の豊かでしなやかな知恵がますます重みを増しています。

初代会長の中島真哉さんという方が「図・ボラの会」ができたころの活動について「10周年記念誌」に書いています。図書館の利用者から、サービスの提供者に回ることは、想像を超える落差があったこと、当時猛烈なスピードで旧来の図書館から電子図書館へと向かっていたときに、週1回の活動では、どうにもならないという危機感のなかで「お助けノート」やパソコンの勉強会が始まったこと、会則をつくることの是非をめぐる「論争」があり、結局、あってもなくても同然の茫洋たる会則をつくったり、会長なんぞいない、といった意見があるなかで会長を選んだり（今や副会長や会計、書記までいるのです）と、つまずいたり転んだりの多難な滑り出しだったといえます。

しかし、こうした試行錯誤のなかから生み出されてきた皆さんの知恵は、現在の活動を支える糧になっっているように思えます。

その後も附属図書館は法人化であるとか、電子ジャーナルであるとか、知の集積であるとか、大小の波に翻弄され続けてきました。しかし、図・ボラの会は、つまずいたり転んだりはあったでしょうが、硬直的で定型的な活動になりがちな職員をしり目に、しなやかに柔軟な「大人の知恵」を発揮され、図書館の活動を支えていただいたばかりか、新たなサービスのあり方に参考となる助言や忠告をいただいたり、真のボランティアであるがゆえの知恵やアイデアを授けていただいています。

附属図書館として、皆さんのこうした活動に十分に報いることはできませんが、それぞれのお立場で、学生や来館者の支援に、知的資源の活用に、あるいは図書館と市民の皆様との架け橋として、生きがいや誇りを感じていただくことが一番の願いです。

オランダ・ドイツの図書館管見

前附属図書館長 植松貞夫

筑波大学附属図書館においてボランティアの方々が始動されてから15年とのこと、現在とこれまでのボランティアの皆様並びに図書館の関係各位に心から敬意を表したいと思います。中央図書館において、ボランティアの方々の存在が欠くことのできない要素として定着していることは素晴らしいことです。これほど成功している例は公共図書館、大学図書館を問わず、国内には例がありません。今後ますますの発展を期待したいと思います。

さて、去る5月末にオランダとドイツで、この10年間に建設された新しい図書館を見学してきました。実質1週間に10以上の図書館を見て回る駆け足ツアーでしたが、中には昼食を用意してくれる所もあったほど館長や広報担当者のホスピタリティ溢れる歓待を受け、大きな収穫を得ました。

いずれの館でも我が国と同様に、情報流通のデジタル化、利用者ニーズの多様化への対応を主な目的として新館の建設を行っています。パソコンが並ぶ閲覧室などは日本でも見慣れた光景になってい

るのでさほど凄いとはいえませんが、利用者にまず来てもらい、館内を快適に活用してもらう仕掛けづくりには学ぶべき点が数多くありました。最初に訪れたアムステルダム市立図書館では、入口の脇、6階までを貫く吹抜けの下にピアノが置いてあり誰でもいつでも弾いてよいのです。私が入館した時も相当に上手い人が演奏しておりました。また、7階には60席ほどのレストランがあり、港と市内が一望できるテラス席では、ビールを飲みつつ館内の本を読んでいるのです。夜10時頃まで明るいこの季節は屋外での活動の方に気が向きそうですが、いずれの図書館でも一心不乱に読書・調べものに集中している利用者で溢れておりました。特に大学図書館の夜遅くまでの来館者数はさすがの筑波大学を大きく上回ります。

次に、私がこれまでみてきた北欧の図書館建築と較べますと、ドイツとオランダの両国は日本の建築基準法に類する法律の規制が厳しく、建築物としての品質の高さは北欧の比ではありません。俗に「納まり」といいますが、天井と壁の接点部の処理など、細部まで非常に丁寧に造られていてさすがクラフトマンシップの国です。建築の世界ではさほど、乃至まったく無名な設計者ながら「建築・インテリア・家具・書架」それぞれについて、自由な発想から個性を表現しつつ全体を違和感なく調和させる高い技能を発揮していることに感心させられました。

これらの図書館は世界同時不況の前、すなわちユーロ圏諸国の経済が好調とされていた時期に計画され、高額な工事費を投じて建設された図書館です。現在は、ご承知のような世界的な混乱とギリシャなどの財政不安のダブルパンチを受け、急激かつ大幅な経費削減を求められる状況に陥っています。もともと効率的に働くのが不得意な国民性といえますが、多くの人手をかけて運営することを基本としていますから、アシスタント系の人を雇用する経費の削減は種々のサービスの停止ないし質の低下をもたらしています。「何々ができなくなったが仕方ありません」と各館長の嘆くことしきりでした。こういった状況に置かれた図書館の対応として、カナダや米国との大きな違いの一つは、市民ボランティアを受け入れることや、市民からの寄付を募るといった発想がないことであると思われます。北米では「図書館友の会」が図書館長・職員と連携して、寄付金集めやグッズ販売店の運営を行うのはごく普通です。入口には目標額まで残りいくらかと大きな看板を掲げたりもします。古くなって利用度が低下した資料は除籍して、入口付近で販売しそのお金を新規図書購入費に組み込んでいます。こういったような活動は両国では見られませんでした。高い所得税と付加価値税（消費税）を納める代わりに、高水準の公共サービスを得るといった考え方を基本とするヨーロッパ諸国では、福祉や慈善目的すなわちチャリティ以外での寄付は考えられないことなのかも知れません。

附属図書館ボランティア専門委員を終えて

人間総合科学研究科教授 真田久

私は、附属図書館ボランティア専門委員会委員として3年ほど務めさせていただきました。当委員会に入る以前から、体芸図書館のボランティアの方々とは接していましたので、実際には5年以上、ボランティアの方々に関わっていたように思います。

附属図書館のボランティアの方々とは話す事は、楽しいひと時でした。何か恩返しを、という思いで、海外に出かけた時の一コマを紹介しようということで、年末などに体芸図書館の事務室や視聴覚室で、スライドを使いながら、スポーツ大会の観戦記などを紹介させていただきました。アテネオリンピック(2004年)やFIFAワールドカップサッカー大会(2006年)などの様子を、紹介しましたところ、

皆さん真剣に聞いてくれたので、これが恒例となり、当時の体芸図書館の職員の方から、次はいつですか、皆さん楽しみにされていますよ。などと言われ、こちらも本腰を入れていくことになりました。

大学生なら、理解しようがしまいが、ある意味おかまいなしに講義することは平気ですが、図書館ボランティアという、教養のある方々に興味をもっていただけるように話すことは、結構こちらも考えるようになりました。私の専門が古今東西のオリンピックについての歴史や人類学でしたので、この分野についてなら、ということでクイズを取り入れて話を展開するようにしたところ、皆さんそれなりに、楽しんでいただいたようでした。

さてボランティアというと、今や、イベントでは必ず必要な役職になっています。近年のオリンピック競技会でも、ボランティアの数は年々増えて行き、北京オリンピックでは、何十万人ものボランティアが活動していました。

ボランティアと言っても幅広く、通訳や手話などの類いから、交通の整理や、会場での案内係、清掃係など多様です。ボランティアの方々は、積極的にイベントに関わることで、そのイベントの特質や理念（オリンピックで言えば、平和な社会建設のための人々の交流）を体得するとともに、その組織への改善への提言を発しています。自らの意志で、無償で主体的に関わっている人たちの意見ですので、一定の説得力があり、それらの提言をその組織がどう活用していくかが、ボランティアの成果の一つになっていると思います。

ボランティア活動とは、「個人の自由意思に基づき、その技能や時間等を進んで提供し、社会に貢献することであり、ボランティア活動の基本的理念は、自発（自由意思）性、無償（無給）性、公共（公益）性、先駆（開発、発展）性にある」と考えられています。（生涯学習審議会「今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について（答申）」平成4年より）。

自発性、無償性、公共性は言わずもがなですが、最後の先駆性という意義は極めて重要であると思います。ボランティアの視点から、大学図書館のみならず、大学のもつさまざまな良い点と悪い点を率直に述べていただく、そのことに気づいた大学が、良い点を伸ばし、悪い点を改めるという繰り返しの中で、ボランティアの方々も自己実現をさらにはかえることができ、組織体としての大学も発展していくという関係性が、先駆（開発、発展）性なのだろうと考えられます。この考えは、本年生誕 150 周年を迎えた嘉納治五郎（1860～1938 年）の「精力善用・自他共栄」の考えに合致しているものでしょう。

私もボランティアの方々とはふれあう中で、オリンピックなどのスポーツのイベントに対して、どのような眼差しで見られているのか、ということについて、たいへんに勉強になりました。

今後も、ボランティア活動そのものが自己開発や自己実現につながるとともに、大学や社会そのものの発展に影響を与えるものであっていただきたいと思います。

ボランティア 15 周年に寄せて

谷田部伸子

ボランティア 10 周年記念の式場で「図・ボラの会」へ学長先生より感謝状をいただいたのがつい最近のことのように思っていたのに、本年 6 月には早 15 周年を迎えました。記念事業として「図・ボラの会」では広報部による「うたがき」19 号—ボランティア活動 15 周年記念号—発行と「ボランティア 15 周年記念食事会」を開くことになりました。食事会は去る 7 月 7 日に先輩、関係職員の方々を迎え温かい応援をいただき、和気あいあい、なごやかなうちに終了しました。「図・ボラの会」世話人としては皆様のご協力に感謝しております。

この 5 年を振り返ってみますと大きな変化がありました。先輩ボランティアと図書館関係者で築き上げられたボランティア活動はもちろんそれぞれ続けられています。顕著な変化として 6 件が思い浮かびますが、特に次の 2 件は活動の中からボランティアが提案、議論生まれてきたといえると思います。

(1) 大学図書館の中に喫茶室「スターバックス」が設けられる。好評で一年中賑わっているようです。

(2) 図書修理グループの活動開始。数年前より製本や好みのカバー付け製本など勉強してきました。簡単な修理も手がけたいというボランティアの意向があり、図書館からの要望と相まって、適切な指導者も得て勉強会を行い、この 4 月から図書修理グループ活動を開始しました。この指導者は私たちボランティアへ仲間入りされました。毎週活動成果は上がっています。

他の変化としては (3) から (6) があげられます。

(3) 男性ボランティアの急増。今年度 50 人中 12 名を占めています。

(4) 耐震工事。平成 20 年より 3 年間の計画で図書館本館の耐震工事が行われています。工事階の進行に従って図書資料の移動、配架、利用案内等の目まぐるしい変更のお知らせに、活動日に大学に出てくると必死に確認し、案内する日々が続きました。ボランティア募集がなかった年もあり、ほぼ 1 ヶ月間全てのボランティア活動が中止になった月もあり、外部からの図書館見学もしばらく受入れ中止されていました。改装された館内は明るく近代的で新しい備品ともども使い勝手が良さそうです。ボランティアカウンターも新しくなり少し場所が移動しました。控室の場所も変わり、図書修理の場所も確保されています。

(5) Tulips の情報システムの高度化に伴いスキルアップをはかっています。

(6) 「グローバル 30」という国の政策により留学生を大勢受け入れつつあり、留学生のための図書館見学が増えました。

ボランティア活動と生涯学習は切り離すことができません。バックアップとして図書館による研修の機会は沢山提供されてきました（フォローアップ研修、講演会、大学内外施設見学等）。「図・ボラの会」の自主研修も毎年楽しく計画・実行されています。次の節目にはボランティア活動は大きく様変わりしているかも知れません。その変化を楽しみつつスキルアップを目指し、ボランティア活動していきたいと思えます。

図書館総合案内

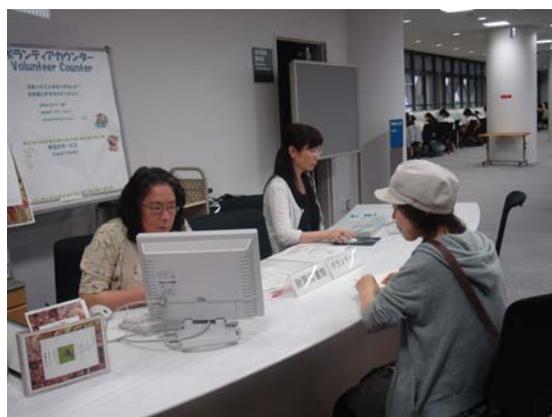
島田久美

平成22年6月で、筑波大学附属図書館ボランティアの活動が15周年を迎えました。図書館総合案内は、15年の間に行われてきた活動の中でも初年度から続いている中心的な活動です。活動が始まった頃は、ボランティア専用のパソコンは無く、冊子体の目録を利用して図書検索をしていたと、初年度から活動してきたボランティア仲間から聞きました。どうしたら利用者にスムーズに対応できるか、手探り状態の中、みんなで知恵を持ち寄って【お助けノート】を作ったそうです。このノートは、活動の中で困ったこと、こう解決したなど、カウンター活動で生じた問題やその解決方法などを記載して、ボランティア間で共有し、活動に役立てる大切なツールとして活用したそうです。

現在は、中央図書館2階のボランティアカウンターで、週5日、午前10時から午後4時まで、3時間毎の2コマに分かれて活動をしています。ボランティア専用パソコンも設置されて、検索方法も様変わりしました。カウンター利用者は、ほとんどの場合初めて接する方で、大学の学生、留学生、閲覧で遠方から足を運ばれた方と、さまざま。持ち込まれる質問も、蔵書・論文検索、図書館内設置のパソコンの利用方法、図書・雑誌の配架場所・所在不明本に関する内容など、いろいろ。利用者の貴重な時間を使っているの、できるだけスピーディーに対応できるよう心がけています。が、ときに難問も舞い込んできます。そんなときには、解決が困難な蔵書・論文検索だったらレファレンスデスクを紹介する、不明本に関してならばメインカウンターに案内するなど、速い判断が必要なケースもあります。図書館の職員の方々には快く対応してもらえるので、カウンターの活動も安心して行うことができます。

そんな総合案内活動の醍醐味は、なんととっても利用者と直接関わること。解決したときの利用者の喜びを間近で感じられることです。利用者からお礼の言葉をもらったときには、本当に嬉しく、活動をやっていて良かったと心から思います。また、図書館を利用する留学生のお手伝いができることも、やりがいのある総合案内活動の一つです。多くの留学生が筑波大学で勉強や研究をしています。そんな留学生はとても熱心です。異国で貴重な経験をして勉学に励んでいるので、少しでも役に立てるよう努めています。

このように、いろいろな利用者とは接し、質問が舞い込んでくる総合案内活動ですから、確実に対応できるように図書館側との情報交換を密にして、利用者へのサービスの向上がますます必要となってきます。また、図書館設置のパソコンの情報量や機能も充実して、いろいろな角度から検索できるよう進歩してきているので、パソコンを使いこなせるようになることも、今後の総合案内に求められる課題の一つです。これからも、利用者が困ったときに気楽に立ち寄ることができるボランティアカウンターをめざして、総合案内活動を続けていきたいと思ひます。



新カウンターの様子

対面朗読活動

柳澤由紀子

長年携わってきた、公共図書館での朗読ボランティアの経験を活かすべく、筑波大学附属図書館ボランティアに加えていただいたのは、発足2年目の平成8年でした。以来14年間の活動は、私にとって、当初の期待以上のものでした。

対面朗読サービスの利用者は、教官、大学院生、大学生、科目等履修生など、さまざまな立場の方々に、要望も多様であり、柔軟かつ速やかな対応が求められます。私自身は、公共図書館での録音図書作成や対面朗読活動の経験をかなり積んでいたのですが、それとは全く異なった自己研修が必要でした。正確に、聞きやすい読みで、視覚に障害のある方々の目のかわりを務めるというだけでなく、必要とされている資料を探し出すことが最も大切で、また、利用者ご自身が論文等を作成するためには表記法を正確に伝えることが求められる場合もあります。大学図書館での対面朗読に向けて、利用者の方々から教えていただきながら経験を積み重ね、また、基本的な読みのトレーニングも、録音図書を作成を通して継続的にブラッシュアップしています。

この14年間に、ボランティア活動のための環境整備はめざましく向上しました。ボランティアカウンターにも対面朗読室にも、パソコンやプリンターが置かれ、資料検索の研修も充実しました。改修工事後は快適な対面朗読室が2室整備されました。活動時間も、要望があればボランティア活動時間外でも、お受けできることになりました。メールによる通知やこの館でも返却できるシステムは、障害のある方にとっては特に都合のよいものです。加えて、障害のある方に限っては中央以外の他館の図書利用にも特別の配慮をしていただけるようになりました。

利用者の要望をボランティアがお伝えすることにより、図書館が配慮してくださったことは数え上げればきりがありません。おこがましい申しようをお許しいただければ、図書館とボランティアとの協働で整備された部分もあるのではないかと思います。“障害学生にとって筑波大学は恵まれた環境だ”ということをよく耳にします。

中央・医学・体芸・図情・大塚の5館で全学の資料を集中管理している筑波大学ならではのシステムが、中央図書館における対面朗読サービスの利便性を高めていると思われます。他大学によく見られるような研究室ごとの資料管理では、図書館でのサービスは機能しないかもしれません。

対面朗読者としてのいちばんの喜びは、利用者の方が論文を仕上げられたり、本を出版されたり、就職を果たされたりすることです。論文を書き上げて、教員採用試験に合格され、巣立っていかれたTさんが、最後の日に図書館公開係に丁寧にお礼の挨拶をしていかれた姿が、目に焼きついています。本当に嬉しいシーンでした。

利用者のプライバシーに関わるがあるので、個々のケースについて述べることはできませんが、現在、私のサポート力は、利用者のご指導のお蔭で回を重ねる毎に向上しつつあります。まさに、活動のための学習、活動を通しての学習の実践です。このような場を提供してくださっている図書館と利用者の方々々に感謝せずにはられません。



利用環境整備活動

小園良子

平成13年以来、利用環境整備のボランティアを始めて9年が過ぎました。懐かしい図書館の正面玄関から面接を受けるためのドアを入った時の事が、ついこの間のように思い出されます。

私は、1979年の開館を控えた中央図書館で、アルバイトとして働いていました。図書をコンピューターで管理する、当時としては最先端の図書館としての開館に備えて、それまでのカード方式から変更するための手作業が必要で、多くのアルバイトが働いていました。ほとんどが家庭の主婦。はじめて仕事を体験する人もいて、若い女性職員に連れられてその日の仕事現場に行くのですが、主婦にありがちなおしゃべりが始まると、「みなさんは辞令を受けて働いているのですから、職員としての自覚を持って仕事をして下さい」と厳しく言われたものでした。仕事をしながら今まで接した事がない本を見ると、何時かこの本を読むことが出来たらと思ったものでした。

当時パソコンはなく、温度管理された部屋に、大型コンピューターが設置されていました。開館してまもない昼休み、中央、体芸、医学それぞれの図書館が多数の利用者に対応出来ず、コンピューターがストップした事があり、カード方式が便利?などと話した事もありました。当時の職員の方々、一緒に働いた人たち。今書架の間で本に囲まれていると当時の事が懐かしく思い出されます。

図書館は、一種のサービス業なので、どういう利用環境整備活動をすると、利用者に満足してもらえるかを考えて過ごしてきたように思います。探している本をすぐに見つけられるようにするのが、利用環境整備の一番の目的。そのためには本が所定の場所に配架されている事。その為に必要な事は、分類ラベルが鮮明である事。薄い本の場合、ラベルの数字が角になって擦り切れ、数字一文字が全く消えていることがあり、別の場所に配架されていたこともありました。この場合いくらシェルフリーディングをしても配架の間違いを見つけることはできません。分類ラベルは、本にとっての身分証明書。配架されている本は、もともと研究室に置いてあった本などそれまで管理されていた場所によって、ラベルが手書きだったり、タイプの印字が薄かったりなど様々で、判読がしにくいものもあります。

かれこれ30年前に出会った本に囲まれて、当時を思い出しながらこの利用環境整備に携われる事、また人生経験豊かなボランティアの方々との出会いなど、私にとって週1度の活動日は大事な一日となっています。

特殊資料整理

海津裕子

毎週月曜日に筑波大学附属体芸図書館で、特殊資料整理（ポスター整理）の活動をしています。体芸図書館には体育科学・芸術関係の特色ある資料がたくさんありますが、その中に全国の美術館・博物館から寄贈された6,000冊以上の展覧会目録、美術館・博物館のニューズレター、展覧会等のポスターがあります。

平成 11 年度から、ボランティアがポスター整理の活動を開始しました。図書館に保存されていたポスター1枚1枚について、タイトル、ジャンル、会場、会期、掲載図版、展覧会目録などのデータを展覧会ポスターデータベースとしてまとめます。

平成 17 年 10 月に、筑波大学電子図書館のウェブサイトから 1990 年～2003 年分のデータが公開されました。以後、随時、公開するデータを追加しています。ウェブ上のそれぞれのデータからは、会場となった美術館や博物館にリンクがあり、筑波大学附属図書館で展覧会目録を所蔵している場合は、所蔵情報にリンクしています。

翌平成 18 年度からは特殊資料整理の活動を希望するボランティアも増えて、月曜日と火曜日に、ポスターの掲示・データベース作成・収納の活動をしています。まず、体芸図書館に届けられるポスターのうち、これから開催される展覧会のポスターをラウンジに掲示します。そしてポスターのデータをデータベースに入力します。会期が終わったポスターは開催年別にキャビネットに収納します。データベースに入力するポスターの枚数もどんどん増えて、活動を開始した頃は年間 100 枚程度だったのが、最近では 800 枚を超えて入力作業も大変になりました。データベースの作成は地道な作業ですが、データの入力項目や手順を見直しながら、皆で分担して活動を続けています。

展覧会のポスターは美しく、デザインも斬新です。掲示されたポスターを見ているとどれも行ってみたいくなりますが、会場が遠いとそうそう気軽に見に行くわけにはいきません。でもポスター整理の活動をしているおかげで展覧会情報を知り、関東近辺の美術館には何度も出かけました。学生の方たちにも掲示してあるポスターをぜひ見てほしいものです。また何千枚分のポスターのデータが、今後何かの役に立ったらうれしいと思います。

筑波大学 展覧会ポスターデータベースのウェブサイト

<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/taigei/poster/welcome.shtml>

広報部活動の歩み

飯田ふじ子

ボランティア活動創世記の頃は、主にメンバー間の情報伝達の役目が強かったらしい会報の第 1 号は、平成 7 年 7 月に発行された。その後は 8 月を除いた毎月発行され、平成 22 年 11 月現在で 172 号となっている。

当初は、広報部員が編集等の発行作業を行っていたが、次第に部員が減少していったこともあり、各活動曜日のコマのメンバー全員参加をお願いし、月ごとの順番で発行作業に取り組んでいただく事となった。広報部員がヘルプをしながらも、曜日の担当者たちが主体的に会報を発行する。苦心を重ねながらの作業の果てに、仲間同士の結束が強まったという声も聞いた。また、一人一人の個性が紙面に浮かび上がり、毎号、興味の違いが滲み出ている、味わい深いものとなっているように思う。

さて、肝心の広報部の活動の要とも言える、ボランティア活動を外部へ知らしめるための広報誌“うたがき”の発行だが、第 1 号は、平成 8 年 9 月。第 8 号までは、ボランティア活動状況や季節の話題などがほとんどだったが、第 9 号「ボランティア活動 5 周年記念号」からはテーマを決めて編集されるようになった。第 10 号「外国語でサービスするボランティア」、第 11 号「対面朗読サービス」、第 12 号「利用環境整備」、第 13 号「自主研修Ⅰ」、第 14 号「自主研修Ⅱ」、第 15 号「ボランティア研修」、第 16 号「私の図書館発見」、第 17 号「行ってみよう！筑波大学」、第 18 号「行ってみよう！筑波大学 PARTⅡ」、そして第 19 号が、この「ボランティア活動 15 周年記念号」である。

第 17 号以降から、筑波大学電子図書館ウェブサイトのボランティアのページで閲覧可能となったが、中央図書館 2 階のボランティアカウンターデスク左脇の、“うたがき”バックナンバーが置いてあるスタンドは、わりとすぐに空になる。特に 17 号 18 号の段が顕著だ。冊子体も、まだまだ必要とされている証のようで、嬉しい限りである。

平成 10 年に電子図書館がスタートしたということで、「図・ボラの会」結成当時から現在に至るまでご活躍されている先輩ボランティアの方々から、当時の話を色々聞き及んだ。インターネットの変遷はすさまじい。その都度、自主的に研鑽を積んでいらした先輩方にはただただ、脱帽である。ボランティア歴も浅く、若輩者の私だが、刻々と変化していく価値観や情報の嵐にもまれながら、自分なりに取捨選択し、尚且つ先達の心意気を損なわない様に、その跡を遅々とした足取りではあるが、歩んでいけたらと思う。

“不易流行”を腕に抱いて。

図書館は大学の心臓部～図書館見学案内～

山内 衛

“うたがき”15 周年特集として見学案内体験記を書いてほしいとの話でしたが、こちらはボランティア活動歴未だ 3 年半。ともあれ、私自身の見学案内活動を通して感じたことをまとめてみました。

タイトルの心臓部という語は、ある大学の先生の一文中にあったものです。いろいろな意味で考えさせられるところがずいぶんとありそうなので、ここで登場させていただきました。

さて、図書館の見学案内について。

ボランティアが案内する人たちには、大きく分けて三つのグループがあります。

一つは新入生のみなさん、留学生、そしてもう一つは、大学見学の高校生やその他のみなさん。今日では、大学も積極的にキャンパスを開放して高校生を受け入れているので、キャンパス内や図書館で高校生グループを見かけることはごく普通の光景となりました。また時々見学に来られる P T A の方がたも、やはりお母さん方が多いのは、いずれも同じ風景でしょうか。

館内の説明用としてボランティア向けにマニュアルがあり、必要に応じて情報が更新されるので、それに沿って皆さんを案内しています。新入生のみなさんが、図書館に関心をもって足をこぼることが増えるようにと、私たちボランティアも心がけています。また、新装なった館内各階の書架の配置や図書の配架、閲覧席の配置などについて、使う側からの利便性を考えての説明にも気を配っています。

中央図書館では、2008 年から 3 ヶ年計画で本館の耐震改修工事が始まり、2011 年春に完了予定の 5 階を除き、工事終了階が順次開放されています。工事後、各階の内容が一新され、明るく使いやすくなったので、見学の皆さんには、なかなか好評のようです。



図書館は、文字どおり「閲覧のために図書を収めている」ところなので、大学生だけでなく高校生のみなさんに本がズラリと並んでいる書架を見ていただくだけでも、来館の意義があると思います。180万冊（中央図書館）もの蔵書をみなさんに体感していただくのが一番です。

本学は、文部科学省により G30（グローバル 30：国際化拠点整備事業）の拠点校の一つとして選ばれ、また各国の大学とも協定を結んでいるので、近い将来、ますます交流がさかんになり、キャンパス内にさまざまな外国語が聞こえる光景が生まれつつあります。ボランティア側も、そのために日頃から「国際性」を磨いておいたほうが良さそうです。容易なことではありませんが。このように、見学案内は、日本や世界各地から集まってきた学生のみなさんたちと、ごく短い時間ながらふれ触れあう機会のある、なかなか有意義にしてまた得がたい体験活動なのです。

日本文化紹介活動

大森久美子

図書館ボランティア活動のひとつに日本文化紹介があります。この活動が始まった当初は、留学生に日本に古くから伝わる昔話やかるた遊びなどを紹介していましたが、現在ではおりがみとちりめん細工が中心になっています。毎月 1 回勉強会を開き、四季折々の作品をつくり館内に飾っています。中央図書館のレファレンスデスクやボランティアカウンターの他、最近では体育・芸術図書館や図書館情報学図書館にも置かせていただくようになり、展示替えが間に合わなくなるほど展示スペースが増えました。

おりがみとひと口に言っても、江戸時代から伝わる伝承のおりがみから、ユニットおりがみなど数学的なもの、人工衛星にも活用されているミウラ折り、ポチ袋や箸置きなどの身近な生活用品まで広範囲に活用されており、とても奥が深いです。ちりめん細工も伝承のお手玉や香袋から、干支の根付や、ひなまつり、端午の節句のミニタペストリーなどさまざまで、毎月の勉強会だけでは足りないほどたくさん作品をつくり展示しています。

また、年に数回は留学生を対象にそれらの作品の講習会を開いています。最近図書館のホームページやチラシ、ポスターなどでお知らせして戴くようになり、参加者も随分増え、留学生だけでなく日本人学生の参加もみられるようになりました。いざ折り方を説明しようとする、その作品の背景や歴史など日本人である私たちがさえきちんと理解していないことがあることに気づき愕然としたり、また国によって考え方や習慣が違うという発見があったり、この講習会は私たちにとっても毎回楽しみひとつになってきています。

以前は留学生の方々にも紹介していた「かるた遊び」は、いまではボランティア間の交流のひとつとして年 1 回お正月明けにかかるた会と称し、百人一首の他さまざまなかるたやすごろくなどを持ち寄り、みんなで楽しむようになりました。

これからも勉強会を重ね、いろいろな日本文化を留学生の方々に伝えていきたいと思っています。



おりがみ講習会

図書修理自主勉強会

飯島倍雄

私が図書修理に興味を抱いたのは、シェルフリーディングをしていると背の破れた図書等が散見され早めに修理が出来たらと考えるようになったことと、附属図書館職員の岡部さんからフォローアップ研修や修理勉強会で学び、修理をボランティア活動に生かしたいと思うようになったからである。

附属図書館で作成した資料によれば図書館による修理勉強会は、平成18年～21年2月まで計10回開催されている。それ以前にも「図書の修理」や「文庫本の改装」などのフォローアップ研修が平成16年以降6回ほど実施されて図書修理活動開始への大きなきっかけづくりになったと思われる。

私もこれ等の多くに参加し、本の構造、修理実習、製本など多岐にわたり教えていただいた。

一方、17年度から始まったテーマ別意見交換会の席上でも修理を利用環境整備の活動に加えて欲しいとの意見がでて、19年度からは体育・芸術図書館を中心に活動が始まり、20年度からは、「利用環境整備」の活動内容細目に①主題別フロア整備の項目の中に「中央図書館及び体育・芸術図書館の各階の書架を整理するとともに、環境整備を行う。また、図書の修理を行う。」と図書修理が正式活動に追加された。この結果、21年度には、中央図書館で年間143冊、体育・芸術図書館で601冊の修理が行われている。実際に修理をやってみると、それぞれの図書の破損の程度、本の種類、紙の性質等で修理のやり方は千差万別で意外と難しいことを痛感した。

この活動を広げていくため、製本工場見学（20年11月）や自主勉強会をしようとする機運が高まり、世話人会の後押しもあり21年6月に第1回図書修理勉強会が発足した。実際に開催してみると、図書修理に熟達した指導者がいないとうまく運ばず、3回ほどで中断を余儀なくされたが、牛久市やつくば市の市立図書館で図書修理・指導に当たられていた山川輝男氏に講師をお願いし、21年11月から8回勉強会を開催、本製本や各種糸綴じなど図書修理の実習・勉強会をお願いした。各回数名から10名以上の参加を得て本年3月終了。22年度からは、山川さんにもボランティアの一員に加わってもらい、毎週定期的に修理日（毎週木曜日午後）を設け、山川さんの指導のもと数人が修理活動を実習しながら学んでいる。

今後の勉強会のあり方を考えると、実習が軌道に乗ったところで、更なる展開を期待したい。図書修理は、何よりも実習が重要であるが、同時に本の構造や紙や糊の性質、製本の歴史とか周辺知識やいろんな製本のやり方を学ぶことも必要で、修理活動外のボランティアの方々にも参加してもらえるような自主勉強会が開催出来ればと思う。更に、他の図書館等との交流などを通じて相互啓発しあえる活動を期待したい。



私のボランティア活動を振り返って

横手喜久子

大学図書館のボランティア活動が始まって 15 年という節目の年にあたり、図ボラの会と自分の活動とを合わせて振り返ってみようと思います。私は 2 年目からの参加で、ベテランと周りから言われたりしますが、実が伴っていないだけに恥ずかしい思いをする時が多々あります。活動開始当初はパソコンでの図書の検索が発展途上にあつたため、時々せっかく慣れたと思ったら変わってしまうことがあり“お助けノート”という仲間内のアンチョコを活用していました。今は格段にパワーアップして検索もし易くなり、それがボランティアカウンターの利用が以前より少なくなった一因でもあるようです。

情報を共有するために立ち上げた図・ボラの会も、有志の方々の努力の甲斐あって軌道に乗り、15 年という年月を経て図書館でのボランティアの存在感は定着したように思います。さて、自分がここまで活動を続けてこられたのは、参加しているみなさんがそうであるように第一には本が大好きなことは言うまでもありません。が、他にもいくつかあります。中でもキャンパスの木々を眺める楽しみはとても大きな要因です。季節ごとにお気に入りのスポットがあります。春の桜、新緑のさまざまな色、泰山木の花はペDESTリアンから間近に眺められるという贅沢を味わえます。何といっても一番のお気に入りは一の矢のメタセコイアの並木道の紅葉（赤茶色）です。年にも依りますが 11 月中旬から 12 月にかけては毎週帰りがけにちょっと回り道して帰ります。

木について印象深いのは伊万里市民図書館の館長さんが 10 周年の記念講演の折、伊万里地方の象徴的なイスの木の話をされ、初めて耳にした木の名前に魅かれ是非行ってみたいと思っていました。一昨年自主研修旅行で念願がかないませんでした。木々ばかりではありません、多彩なメンバーとの交流も私にとってよい刺激になります。毎年更新の時期になるといろいろ考えるのですが、メンバーの顔がちらちら浮かび、木々の様子が目に浮かび・・・で月曜日の午前にとっかど居座ってしまったような感じになってます。これからも楽しみながら活動を続けていこうと思います。

ボランティア活動、この 5 年を振り返って

尾崎みち子

ボランティア組織の開始と同時に参加したこの活動も今年で 15 周年になり、この 7 月 7 日には新旧のメンバーを交えて記念パーティーを以て祝した。この機会にここ 5 年間の活動を振り返り感じた事、経験した事などを記したい。

2005 年にはつくばエクスプレスが開通した。2004 年に筑波大学も独立行政法人化し、学内外に「開かれた大学」という方針がさらに反映されたこともあってか、全国各地から高校生、PTA、個人など幅広い見学者が訪れるようになり、国際情勢の変化を反映してか、中央アジアや旧東欧圏からの留学生を案内する機会も増えてきた。

2008 年から場所を変えながら行われている一連の耐震改修工事により、2 階のメインフロアやスタディールームは明るく心地良い場所に生まれ変わった。工事は間もなく終了し、本来の静かな

図書館に戻るはずである。

最後に、見学案内で印象に残った思い出を記す。去年の事だが、鹿児島のある島から船、飛行機、電車と乗り継いで、はるばる来館した母娘を案内する機会があった。文系志望だという娘さんは館内の蔵書の充実に感激し、この大学への入学は夢だと言った。果たして彼女の夢は叶ったろうか。

明るい雰囲気図書館

中島清明

「ここ5年間の変化は」という題目を戴いたが、何といても耐震改修工事に伴う、館内リニューアルでしょう。館内の表情を一変させる出来事でした。本来はいかめしい響きの耐震工事の筈が、同時に行った全館フロアプランの実施がソフトな空間を作ってくれたからです。ゾーニングが整備され、従来アカデミックな雰囲気で総称された荘重さから、若者好みの明るい色調に変わりました。

ボランティアカウンターも、一寸気恥ずかしい位のデスク・案内表示のデザインと色調です。窓際のキャレルデスク、自習に最適なスタディスペースと快適で落ち着いた場所となりました。かつては留学生がよく相談に来たり、ワラをも掴む感じでカウンター前で様子を伺う来館者がいたりしました。こういう人達が戻って来て、更に来館者の増える仕掛けが必要かなと思います。

体芸図書館ボランティア活動体験記

市村光志郎

私は、平成19年度より体芸図書館で、3階の芸術関連・4階の体育関連図書のシェルフリーディングのボランティア活動を始めました。シェルフリーディングの作業要領については、事前研修に沿いながらも実際に活動されていました先輩ボランティアの横井さんの手ほどきを受け、

- ① 書架の本を一連ごと一時退避させ、棚を水雑巾で清掃。
- ② 清掃後、本の埃を払い請求記号（ラベル）順に再配架する。

方法を踏襲して行っていました。

この作業方法では、体芸図書館は美術書などの大型本も多く、活動一コマの時間内には2~3連が精一杯の為、現在では、書架の清掃は本の隙間のみ限定し、本の埃を払いラベル順に配架がされていることと、ラベルの貼付状態の確認にとどめています。一冊一冊を丁寧に扱う気持ちに変化はありませんが、これにより10連ほどが可能になりました。どちらが良いかは賛否両論があると思いますが、利用者の利用しやすい環境を整えることを優先して実践しています。<4階は昨年リニューアルされ書架も堅固なものになり、室内も明るく清潔になりました。今年山田学長も視察に来られたと聞いています。>

シェルフリーディングは地道な作業の繰り返しですが、作業中にふと目にした「魔方陣」という言葉から「デューラーの銅版画」に辿りついたり、絶版になっている「呉讓之の書」に巡り合ったりするなど、楽しい寄り道もさせてもらいました。何より本に囲まれ、ゆったりした時

間が淡々と過ごせたことに感謝したいという思いがあります。

又、私の人生は筑波大学附属図書館のボランティアに携わることで、譬えて言えば単線人生から複線人生に変わりました。ボランティア仲間の方々と素直なお付き合いを通し、皆さんがさまざまな分野で努力をされていることを知ったり、85歳までボランティア活動を実践された方もおられたりと、自分の今まで歩んできた世間との大きな違いを感じましたし、周りの人々にも恵まれ、人の連鎖が大きな円になって行くのを実感しています。

これからも先輩ボランティアの方々がこれまで積み重ねられた活動を継承し、図書館サービスの向上に少しでもお役に立てることを目標にボランティアに励みたいと思います。

楽しく修理活動をやっています！ <体芸図書館修理活動記>

山内衛

筑波大学に附属する図書館中、その名称どおり体育・芸術関連を主とした図書・資料が収蔵されているのが、ここ体育・芸術図書館です。

現在、同館で活躍している修理活動メンバーは6名、そのうち女性が3名。これら女性陣により、ここでの修理活動が支えられているといっても過言ではなく、本稿ではコツコツと地道につづけられているみなさん方の活躍ぶりを通して、修理活動にたいする思いをまとめてみました。因みに、私も昨年5月から体芸図書館の修理活動メンバーに加わったひとりで、超初心者です。

修理活動に女性のみなさんが関心を持ち始めたきっかけは、かつて図書館職員岡部さんによる修理の講習会に参加して、修理に関心を持ち始めたことが何と云ってもいちばん大きいようです。

この活動を始める前、他の活動を通じて現場の書架の状況を知る機会が多かったことが、修理活動に目を向ける要因にもなったのだと思います。

体芸図書館では、ベテランの男性ボランティアの清水さんを中心にして修理の方法を勉強するようになりました。自然発生的に志を同じくするみなさんが集まり、修理活動が軌道にのり始めたのは、凡そ2年半前。いまではすっかり定着した活動となっています。

大勢の学生さんが利用するので本が傷むのはやむを得ないかもしれませんが、貴重な本の寿命が短くなるかも知れないという問題も重要です。大学の図書館では、破損した本はできるだけ元の状態に戻してあげる、つまりそのように「修復」させる必要があります、無理な修理は行わないというのが鉄則であると聞きます。みなさんが、慎重に作業をされておられるのが、私の目にたいへん印象深く映りました。

現活動メンバーの女性陣が、修理活動にどのような思いをもってこれまでやってこられたのか、お聞きしてみました。(アイウエオ順)

内多さん。「以前、図書館職員の岡部さんやベテランのボランティアの方から本や修理について随分と教えていただきました。それが基礎になって、今日まで修理活動をつづけてこれました。楽しんでこの活動をやっています。どのように修理をすれば、この本がよくなるか、いつも考えています」。

假谷さん。「以前から興味があつて、自分でも修理の勉強をやっていました。この仕事(修理活動)が気に入っています。地味だが、本によって修理の方法が違うので、それをいろいろと考えて

修理をするのが、楽しい。」

真鍋さん。「楽しく修理作業をやっています。以前、別の市民講座やここでの修理勉強会に参加して、本の修理に興味をもったのがきっかけです。その後、整備活動で本の破損をみて、修理活動を始めようと思いましたが、本の修理は難しいこともあります。仕事では楽しみも喜びもあり、気持ちを集中できるのが良いですね。それに仲間と会える楽しみもあるし、社会とのつながりができるのがよい刺激になっています」。

修理の大切さ、本への愛着、その上にさらに「活動に参加するのが楽しい」ということばに重みを感じさせられます。みなさんのこの思いが、この作業をながくつづけさせる支えになっているのでしょう。

図書修理は、一見地味な作業のようにもみえますが、本が健康で長生きしてもらうためには、なくてはならない重要なことなのです。

読者のみなさんには、本を手にしたときにいろいろな人々の支えがあることに少しでも思いをはせて、ぜひとも大事にとりあつかっていただきたいと思います。願うものです。

年度	業務紹介・研修・学内および学外施設見学	講演会・特別展ミニレクチャー
17	<ul style="list-style-type: none"> ・電子ジャーナル入門 ・文庫本の改装について（第2回） ・学術情報流通と大学図書館 ・学内施設見学（記念室めぐり） ・図書館での新しいWeb サービスについて ・学外施設見学（明治大学図書館、大塚図書館 秋葉原地区） ・図書の修理について ・平成18年度新規登録ボランティア事前研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・附属図書館ボランティア10周年記念講演 「人が変わるまちが変わる」 講師：犬塚まゆみ伊万里市民図書館長 ・平成17年度特別展ミニレクチャー 「江戸前期の湯島聖堂」 講師：守屋正彦人間総合科学研究科教授
18	<ul style="list-style-type: none"> ・新図書館ホームページ説明会 ・見学案内研修 ・図書館資料の修理 ・図書サービス係業務紹介 ・学内施設見学（農林技術センター） ・学外施設見学（一橋大学附属図書館） ・資料修理勉強会 ・図書館ホームページ&データベース研修 ・平成19年度新規登録ボランティア事前研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・附属図書館ボランティア講演会 「図書館における多文化サービス」 講師：吉田右子図書館情報メディア研究科助教授 ・平成18年度企画展ミニレクチャー 「中国三大奇書の成立と受容」 講師：大塚英明人文社会科学研究科教授
19	<ul style="list-style-type: none"> ・見学案内研修 ・障害者サービス ・学内施設見学（医学図書館・ 図書館情報学図書館） ・学外施設見学（成蹊大学情報図書館） ・平成20年度新規登録ボランティア事前研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・附属図書館ボランティア講演会 「和古書のはなし」 講師：綿抜豊昭図書館情報メディア研究科教授 ・平成19年度企画展ミニレクチャー 「古地図の世界-世界図とその版木-」
20	<ul style="list-style-type: none"> ・体芸図書館見学案内研修 ・レファレンス係業務紹介及びリポジトリ ・図書館資料の修理勉強会 ・学内施設見学（計算科学研究センター） ・学外施設見学（東京都立中央図書館） 	<ul style="list-style-type: none"> ・附属図書館ボランティア講演会 「起源までさかのぼって考える —国語科における教科内容決定の原点—」 講師：甲斐雄一郎人間総合科学研究科教授
21	<ul style="list-style-type: none"> ・見学案内研修 ・体芸図書館見学案内研修 ・目録データベース係及び相互利用サービス係 業務紹介 ・図書修理研修会 ・学外施設見学（国立情報学研究所） ・学内施設見学（陸域環境研究センター） ・平成22年度新規登録ボランティア事前研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・附属図書館ボランティア講演会 「自然から学ぶ」 講師：木越英夫数理物質科学研究科教授 ・平成21年度特別展ミニレクチャー 「日光 描かれたご威光」 講師：山澤学人文社会科学研究科講師

図書館ボランティアについて

図書館ボランティア

筑波大学は開かれた大学として地域社会との融和を図っております。その努力の一つとして1995年6月1日には全国の国立大学に先駆けて図書館ボランティア制度を発足させています。図書館ボランティアはつくば市およびその周辺に住む家庭の主婦、定年退職者などから選ばれており、現在約50名近くの図書館ボランティアが活動しています。いずれも生涯学習に大きな関心を持ち、ボランティア活動に熱心であり、豊かな人生経験と教養を備えた人々であります。図書館ボランティアはその活動を通じて、開かれた大学としてのイメージを高め、図書館サービスの向上に、地域社会との融和に貢献しております。

図書館ボランティアはおもに中央図書館で活動し、2階・4階ボランティアカウンターを定位置としております。

その主な活動は：

- 1) 図書館総合案内
館内窓口案内、資料配置案内、資料探索案内、端末機操作案内、
各種申込記入案内、身体障害者や日本語に不慣れた外国人へ図書館利用支援。
- 2) 対面朗読
視覚障害者のための対面朗読、館内での資料探索支援。
- 3) 利用環境整備
中央図書館及び体育・芸術図書館各階の書架の整理、図書ラベルの貼り直し、
など利用者が使いやすい環境を整える。
- 4) 体育・芸術関係資料の整理
美術展ポスターなどの整理。
- 5) その他
外国人のための日本文化紹介、留学生オリエンテーションの補助、
図書館見学案内。

などです。

上記1) 図書館総合案内および3) 利用環境整備のため、図書館ボランティアは毎週、月～金の5日間、午前のシフト（10時～13時）、午後のシフト（13時～16時）に分かれて活動しています。

視覚障害のある方には上記2) 対面朗読など、訓練されたボランティアによる支援を行っています（予約が必要）。

留学生の皆さん、図書館を利用されるにあたって、わからないことがあれば、ご遠慮なく図書館ボランティアに相談してください。

図書館ボランティアは喜んでお手伝いします。

ON THE LIBRARY VOLUNTEERS

Prepared by Volunteer

The University of Tsukuba has been maintaining its policy to be friendly to the public, and maintain good relationship with the local community. As one of its efforts toward that objective, the University took a lead to adopt a library volunteer system. The system was started on the first of June 1995, which was said to be the first one among the national universities in Japan.

The number of library volunteers is nearly 50 persons. The system is mainly organized with housewives and retired persons who are living in Tsukuba City and its vicinity. They are having a continued interest on life-long learning, and are well experienced in their lives with good common sense.

It is believed that efforts of these volunteers have contributed for maintaining friendly images of the University and good relationship with local community. Furthermore it brought a lot of improved services of the Library as well.

The library volunteers are generally stationed on the 2nd and 4th floor of the Central Library of the University. Their major missions are:

- 1) General Information Service on the Library:
on general information, on document layout information, assist document search, assist PC-terminal operation, assist filling out various application forms, assist handicapped persons and foreign visitors
- 2) Assist Sight-handicapped Persons:
assist document retrieval and readout these for them
- 3) Maintain Library Environment (Shelf Reading):
check arrangement of books on shelves and their "call number tags" (light maintenance work on books to keep the library environment friendly to users)
- 4) Restore Materials in the Arts and Physical Education Library:
- 5) Others:
introduce Japanese cultures to foreigners, assist library orientations for foreign students, library tour guide

On weekdays, from Monday through Friday, the service of volunteers is done in two shifts, that is, morning shift (10:00 to 13:00) and afternoon shift (13:00 to 16:00).

For sight-handicapped persons, services by specially trained volunteers for the above item 2 is available when requested. (Reservation is needed.)

Whenever any question comes out in your mind, please feel free to contact volunteers at the Volunteer Counter on the 2nd and 4th floor. They are willing to help you.

うたがき

筑波大学附属図書館ボランティア広報紙

第19号

ボランティア研修

平成23年3月発行

編集：筑波大学附属図書館ボランティア広報部

発行：筑波大学附属図書館

〒305-8577

茨城県つくば市天王台1-1-1

TEL:029-853-2348 (情報管理課)